P1-020

市民公開セミナー「じょうぶな歯とじょうぶな体」を開催して －受講者へのアンケート調査より－

松澤 光洋[1]、小方 清和[1]、藤岡 万里[1]、高野 博子[1]、浜野 美幸[1]、早川 龍[1]、田中 英一[1]、秋山 千枝子[2]、高橋 系一[2]、辻 祐一郎[2]、塙 佳生[2]、神川 晃[2]

[1]日本小児歯科学会関東地方会、
[2]東京小児科医会

【目的】
近年、口腔の健康が健康寿命の延伸に寄与することが明らかとなり、歯科の重要性が認識され始めている。生涯にわたって健全な口腔機能を営むためには、小児期から口腔の健康を守る生活習慣の確立と食べる機能の健全な発達を促す環境づくりが大切であり、その担い手となるのが統合性と受診のしやすさを特徴とするかかりつけ医である。小児歯科学会関東地方会と東京小児科医会では、「子どもたちの健康を共に考える」活動の一環として、平成25年より合同公開セミナーを開催している。今回は、かかりつけ医の重要性を認知していただくための講演を企画し、アンケート調査を行ったので報告する。

【方法】
講演1)、2)では、「かかりつけ医って・・じょうずなお医者さんのかかり方」と題して、小児科医、小児歯科医の立場から子育ての中でかかりつけ医を持つ環境の大切さについてそれぞれ30分、また講演3)ではアスリートの視点から「子どものじょうぶな体のつくり方－私のオリンピック経験を踏まえて－」と題して60分のプレゼンテーションを行った。3名の講師と会場の参加者とともにパネルディスカッションを行い、閉会後、参加者にアンケート調査を実施した。

【結果および考察】
参加者のうち142名から回答があり、回答率は79％で女性が9割を占めた。年齢は、20歳代が27％と最も多く、次いで40歳代23％、30歳代17％、50歳代15％、60歳代以上が11％となり、20歳代以下は7％で最も低かった。本会参加のきっかけは、「ポスターやチラシを見て」が35％と最も多く、次いで「知人から誘われて」31％、「演者などから誘われて」8％、「新聞をみて」1％、「ネットで知って」1％であった。託児室設置の感想については、「子どもがいても参加しやすくてよかった」、「是非、必要」、「続けてほしい」など感謝の声が多くみられた。今日の感想については、「とてもよかった」、「まあまあよかった」を合わせて98％の肯定的回答が得られ、「今回のテーマはとても良かった」などよかった内容についての具体的な記述が多くみられた。かかりつけ医が単に疾病の予防や治療を行うだけでなく、家族の生活に関わり、健やかな子どもの成長を共に見守る存在であることを理解する一助になったと思われる。今後はさらに連携を深め、子どもたちの健康管理や疾病予防を支える取り組みを継続していく予定である。

P1-021

1歳児歯科健診受診の有無による2歳児の口腔衛生習慣の変化

高橋 摩理[1]、冨田 かをり[1]、内海 明美[1]、矢澤 正人[2]、関谷 紗央里[2]、五十嵐 由美子[3]、宮内 恵[4]、平川 知恵[5]、島村 あみ[6]、弘中 祥司[1]

[1]昭和大学 歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門、
[2]新宿区健康部 健康づくり課、
[3]新宿区健康部 牛込保健センター、
[4]新宿区健康部 四谷保健センター、
[5]新宿区健康部 東新宿保健センター、
[6]新宿区健康部 落合保健センター

【目的】
近年の歯科疾患の構造変化により、口腔の機能的な面に対する指導・支援が求められてきている。そのため東京都某区では平成20年度から「歯から始める子育て支援」事業を開始した。1歳児および2歳児歯科健診を実施し、健診前に歯と食べ方に関する事前アンケートを行っている。今回、2歳児歯科健診を受診した幼児を対象に、1歳児歯科健診受診との関係を、アンケート結果を元に検討した。

【対象と方法】
対象は、平成27年度に東京都某区における2歳児歯科健診を受診した2歳児1,298名（男児619名、女児679名）とその保護者である。2歳児を1歳児歯科健診受診の有無、性別で群分けし、アンケートの各項目について検討を行った。統計学的有意差の検討にはカイ二乗検定を用いた。

【結果】
1歳児健診を受診した幼児（以下、健診あり）は885名（男児423名、女児462名）、受診していない幼児（以下、健診なし）は413名（男児196名、女児217名）であった。夜間・就寝前の哺乳習慣がある幼児は健診の有無に関わらず約20％であったが、健診ありでは哺乳瓶の割合が有意に少なかった。甘味飲料を摂取していない幼児は、健診ありで有意に多かった。食べ方に気になる点がありと回答したものは健診の有無による差は認められなかったが、男児に多い傾向であった。

【考察】
1歳児歯科健診では、歯科医師が食べ方や口腔内で気になる点についての相談に答え、その後歯科衛生士による口腔衛生指導を行っている。哺乳習慣は、健診の有無で差はなかったが、哺乳瓶使用の割合は健診ありに少なかった。母乳育児の継続・終了は保護者の判断によるが、哺乳瓶に関しては、コップなどへの移行を進めるなどの対応がなされ、健診ありに哺乳瓶使用が少ない結果になったと思われた。甘味飲料摂取頻度は、健診ありのほうが少なかった。野菜ジュースやイオン水は体に良いと認識し飲ませている場合が少なくないが、糖分やpHに注意が必要であり、1歳児健診で情報を提供することで摂取頻度を抑えられたと考えられた。食べ方で気になる点に関して、健診よりも性別による差が認められた。気になる項目の内容が年齢により変化するため、1歳児健診での指導の有無に影響を受けにくかったと推察された。幼児は発達・発育していくため、その年齢に応じた支援が必要である。支援方法を検討するうえで、各年齢における健診での指導内容の蓄積が重要と思われた。

Presented by Medical*Online